様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年　5 月　30 日現在

機関番号：32607
研究種目：若手研究（B）
研究期間：2009～2011
課題番号：21720099
研究課題名（和文）　アイルランド独立黎明期および 1970 年代以降の情勢作家作品における男性の表象
研究課題名（英文）　The Representation of Masculinity in Irish Women Writers
研究代表者
市山　陽子（ICHIYAMA YOKO）
北里大学・一般教育部・講師
研究者番号：50458741

研究成果の概要（和文）：
発禁処分となったKate O'Brien とEdna O'Brien の初版本は収集開始初期から1990年代におけるリバイバル版の普及により急速に減っている実態が明らかとなった。
さらに男性像の表象の検討はこれまで女性の表象に焦点があてられてきがちであったアイルランド人女性作家作品に新たな視点を提供したことになる。本研究において特に顕著であった男性像の周辺化今後本研究該当期間以外の期間特に1920年代から1960年代にかけて出版された作品に拡大することが今後の研究課題になると考えられる。

研究成果の概要（英文）：
The study clearly indicates that the number of first editions of banned novels by Kate O'Brien and Edna O'Brien is drastically decreasing due to the publication of popular editions in the 1990s. The analysis of the way Irish women writers depict men in their work has provided a new perspective on writings by Irish women, who appear to have focused their attention on the representation of women. Future research needs to focus analysis on determining the prevalence of the marginalization of men in writings by Irish women published between the 1920s and the 1960s.
交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2009 年度	400,000	120,000	520,000
2010 年度	100,000	30,000	130,000
2011 年度	200,000	60,000	260,000
年度			
年度			
総　計	700,000	210,000	910,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：英米文学・英語圏文学
キーワード：アイルランド文学、女性作家作品

１．研究開始当初の背景
アイルランド独立黎明期に発禁処分となった女性作家作品における初版本の装丁の検討および女性解放運動の盛んになった 1970 年代以降のアイルランド女性作家の作品における男性像の表象の検討は先行研究が限られており、研究分野として意義深かった。

２．研究の目的
発禁処分となった初版本の装丁を検討する

ことで作家の検閲に対する姿勢を検討し、またアイルランド女性作家の作品におけるレトリック上の戦略を解明する。

３．研究の方法

発禁処分となった初版本の収集と独立黎明期および1970年代以降のアイルランド女性作家作品における男性の表象の検討。

４．研究成果

(1)初版本に関してはKate O’BrienはMary Lavelleを含む3点、Edna O’Brienに関しては2点を入手した。Kate O’Brienの3作品の中で表紙カバーのあるものは2点で色彩が出版から 50 年以上たった現在においても色鮮やかなものと言える。特に *Mary Lavelle* にはデフォルメされアニメ的とも言えるほど少女趣味の表紙絵が用いられている。表紙カバーのないものに関しても、それぞれ挿絵が鮮やかに施され、内容のラディカルさとのギャップが著しいと言える。例えば *Mary Lavelle* のそれはファッショナブルな服装と化粧を施した物憂げな表情の女性が全面に配されており、男性を引き付ける魅力的な女性というイメージを打ち出している。*The Last of Summer* の表紙カバーには豊かな海辺の田園風景の中に男女が寝そべっておしゃべりに興じている様を描いており、伝統的な家庭を守る天使、母親という役割を受動的に受け入れる女性のイメージがある。そこには自らのアイデンティティの確立のために家族や男性を捨てる女性という内容をうかがわせるものはないと言わざるを得ない。対してEdna O’Brienの作品にはそうしたセンチメンタルな表紙や挿絵は見当たらない。抽象的な絵画が使用されており、Kate O’Brienのそれとは一線を画している。これは前者の出版が1960-70年代にあることからも推察されるように 1970 年代の英米におけるフェミニズムの運動の高まり、アイルランドにおける南北の緊張という時代を背景に、内容に忠実な表紙を付けることが可能になってきていたことを示している可能性があり非常に興味深い。

いずれの作品もアメリカにおける出版となる。これは発禁処分となったアイルランドには初版本を探すことの困難さが改めて浮き彫りとなった形であり、こうした作品が女性解放運動を推進する活動家によってアイルランドに逆輸入されたという主張を裏付けるものでもある。今回おしくも入手不能であった作品について、特にアメリカ以外の国での初版本を入手することにより、今後こうした初版本におけるカバーの表象を検討していきたい。

(2) 男性像の検討についてはこれまで女性の表象に特徴的であった国家のシンボルかつモラルの担い手という存在に対して、兵士であった男性はアイルランド独立後の長い景気低迷において徐々にその存在を弱めていることが作品から伺われた。

21 世紀における二つの大戦、第一次世界大戦と第二次世界大戦は帝国主義の終焉を意味していたが、その中でアイルランドはいち早くイギリスからの植民支配からの脱却を試みた。それはすなわち帝国による植民地支配の不当性を論じ、独立国家としての正当性を主張するために国家と国民の関係が厳密に定義されなおされなければならないというものであった。帝国主義支配の最強のイデオロギーであるナショナリズムとカトリシズムの結びきはアイルランド女性の身体と精神を束縛するものであった。18 世紀に近代のナショナリズムが出現したとき背景にあった中産階級の台頭によるその経済活動と生活様式の特徴化、すなわち、下層階級、貴族の双方に対して自らの地位を主張するために作法から道徳に至る生活の規範化、そして工業化における不安定な時代における確固たる構造の構築と同じく、21 世紀初頭のアイルランドにおいてはアイルランドの国家としての正当性と国民の定義付け、理念の裏付けとして決定的な役割を果たした。すなわち、国民的ステレオタイプを男性、女性の双方にうちたてることにより、自らのアイデンティティをゆるぎないものとすることであった。もともとナショナリズムの主張する男らしさは 18 世紀のギリシャ復興において生まれた理念を規範としていた。ナショナリズムは全ての人に生活の場においてさえ各々の役割を割り当てた。両性の役割は明確に区分

されなければならず、文学における表象はそうした家庭内、社会における男性と女性の分業が近代の規範として再確認される場であった。その区別により管理を強め安全を確保する仕組みが作られた。女性に割り振られたのは守護者、保護者そして母親であり、男性に割り振られたのは男らしさと雄々しさである。男女ともに結婚し、子供を作ることはキリスト者として、愛国者としての義務になった。女性は美と気品を体現しなくてはならなく、男性は力強さや雄々しさを強調しなければならなかった。男らしさは社会と国民に対する忠誠心へと変換された。反対に女々しさは反社会的なものとみなされた。各個人の容姿や性格までも分類され、力強さや男らしい挙動は美徳の表れであるのに対して、神経質は悪徳の表れであるとみなされた。こうしたカテゴリーからの逸脱や混同は危険をもたらすものとして、断罪した。行動規範を逸脱するもの、男女の教会を踏み外したものは全て異常者であり、社会を脅かすものと判断された。アイルランドにおいてこれは理論的にはカトリック教会の教義と国家による憲法制定により、そして実質的には検閲法の制定により徹底的に行われた。

こうした国家によるステレオタイプへの抵抗を強めるアイルランド女性作家に共通するのは、家父長制を頑強に主張するものの時代に取り残される「独りよがりな」父親、経済の担い手になり損ね、家族の女性（母親や姉妹）に依存して生きる「女性のように繊細な」息子、酒や賭博におぼれ、妻を稼ぎ手にする夫、苦しむ妊婦に無関心で冷酷な男性医師などいずれも国家の理想とする「男らしく雄々しい」姿からは逸脱している。酒に浸る *The Country Girls* の父親は妻子を絶え間なく虐待し、娘を女子修道院に追いやり、娘が生活費を稼げる年になった時に孤児院に迎えに来る *The Land of Spices* の父親に力強さや雄々しさはない。尊敬され頼られるべき父親や兄弟は一転女性の経済力に依存し搾取する姿をあらわにする。

また男性像の描写は往々にして背景化され、代わりに存在感を示すのは力強く運命に抗して生きる「母親」や「妻」そして「女」である。特にEdna O'Brienの作品における男性の存在は母親や妻の陰に見え隠れする不在の「父親」や「夫」であり、物語の中心を占めるのは女の人生である。Maeve KellyやAnne Haverty においてはan ordinary manを職にあぶれ、妻の問いかけに答えるすべのない男として描いている。そこに憲法が規定する家庭の基本構成単位である家族の中心をなす力強い男性はいない。

さらに背景化された男性が当該女性に与える影響は時に圧倒的な力（家父長制、カトリックの教義）を持つが、その強大さを男性の表象の希薄化と比較した時、作家の意図は鮮明となる。

男性の表象においてもう一点特徴的なのは家族という国家の認めた国民の基本単位を再生産するという男女に課された役割の放棄、特に父親による母子の関係の断絶である。Edna O'Brienの小説には繰り返し家族を捨てる母親が描かれる。本来家族を守り、育てるべき母親を家族から追い出すのは、酒や賭博にふけり妻や娘を虐待する父親である。Maeve KellyはHughの実家であるCreagh家が強く男子の後継者を期待するのに対して、44歳という高齢になるまで結婚しないことによりその可能性を小さくすることに貢献している。またHugh,Adrian, Eleanorはいずれも医者であるが、Adrianが女性患者の訴える痛みに対して「不平を言いすぎる」と断罪するのに対して、Eleanorはその言葉を一生懸命聞き痛みの後ろにある理由を探ろうと努力する。男らしく女性を守り家計の担い手となり、安定した環境の下家族を再生産するべき男性の役割を果たす男性像が描かれることはないことは大きな特徴である。

女性の表象が多義化する中で男性の表象が矮小化・希薄化される過程を検討することは、女性の表象のみに焦点を当てることに比べて意義深い。今後は女性像との比較検討を試みることおよびほかの期間に発行された作品にも検討の対象を広げること必要であると考えられる。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計０件）

〔学会発表〕（計０件）

〔図書〕（計０件）

〔産業財産権〕
○出願状況（計０件）

○取得状況（計０件）

６．研究組織
(1)研究代表者
市山　陽子　（ICHIYAMA YOKO）
北里大学・一般教育部・講師
研究者番号：50458741

(2)研究分担者
なし

(3)連携研究者
なし